

オルテガ・イ・ガセット研究

—ヨーロッパ社会学史の一齣—

A Study on the Sociological Theory of Ortega y Gasset

山 川 基
小笠原 真
(奈良教育大学名誉教授)

1. はじめに——問題意識の所在

本小稿で取り上げるオルテガ・イ・ガセット (Ortega y Gasset, 1883-1955) については、以下に述べるように様々な言説が見られるが、それらは、彼のヨーロッパ的哲学の深みと近代社会に対するペシミズム的見解に起因していると言っても過言ではないであろう。

そこで先ず、どのような言説が見られるか見ておきたい。彼のことを「スペインの思想家」⁽¹⁾、「現代文明論の先駆者」⁽²⁾、「文化哲学者」⁽³⁾、「スペインの政治学者・社会学者」⁽⁴⁾といったものに始まり、やや言葉を費やしては「みづから『輪転機の上で生まれた』と述懐したオルテガは、危機の時代という歴史の輪転機の上で回った」⁽⁵⁾とか、「早くから現代が歴史の転換期であることを強調し、そこに含まれている危機の克服をめざして警鐘を鳴らし続けてきた、20世紀の生んだ最もすぐれた思想家の一人」⁽⁶⁾とか、「20世紀スペインの反実証主義的な風潮のなかにあって、最も大きな影響力を誇ったのはオルテガ・イ・ガセットであった。彼は1920年代に登場してきた、かつての個人主義的な知識人でもなく文学畑の知識人でもない新しい型の知識人グループのリーダーとして頭角をあらわした」⁽⁷⁾とか、また「社会学的には大衆の問題をいち早くとりあげたことで知られるが、ベルリン大学に学びジンメルの影響をうけて、元来は文化哲学者である」⁽⁸⁾とか、「カント研究から出発したが、その後、生・理性・視点および展望主義の立場から自己の哲学的人間学を確立」⁽⁹⁾したとか、「生の哲学者とくにニーチェと、現在の実存主義の中間に位置し、同国人ウナムノの思想をつぐスペインの哲学者。大衆社会論に先鞭をつけた」⁽¹⁰⁾等々にしめされているように、現代社会論の一種としての大衆社会論、それもペシミスティックでエリート主義的性格の強い大衆社会論に、正に先鞭をつけたオルテガを、ヨーロッパ社会学史の一齣としてあえてここで取り上げてみたい。

それというのも、「20世紀の前半、1930年代前後のヨーロッパに登場した一連のすぐれた思想家達、例えば、オルテガやホイジンガ、マルセルやピカート、ハイデッガーやヤスパースなどは、第一次大戦で墓石されたヨーロッパの精神世界や第二次大戦の迫っている暗雲の

中で、ヨーロッパの運命を深く考察することによって、20世紀前半の精神状況の診断を行った」⁽¹¹⁾ のに加えて、特に社会学的視座のものに限っても、「最初に『大衆』に注目したオルテガ・イ・ガセット、大衆社会論に先鞭をつけたマンハイム、ナチズムの社会心理を分析したフロム、階級なき社会の国家を論じたレーデラーなどのヨーロッパの学習から始まり、その後アメリカに渡って、リースマン、ミルズ、ホワイト、コーンハウザーなどを中心に展開された『大衆社会論』が、現代社会論の一種として登場する」⁽¹²⁾ ことを想起する時、彼が後学に与えた影響が如何に大きかったかが判明するからである。それに加えて、オルテガの時代的感觉や将来展望も抜群であったことも見落とせない。つまり、彼は一哲学者として以上に、研ぎ澄まされた嗅覚と分析力を兼ね備えていた真のジャーナリストであったと言えよう。何となれば、近代ヨーロッパの形成にあたって、フランスとドイツを軸とする二裂葉構造を明確にし、近未来のヨーロッパ統合の必然性を見抜いていたこと、さらには世界情勢のなかでの中国やイスラム勢力の台頭を予測していたことなども、今日の世界の視点に立って考えてみる時、ただ炯眼としか言いようがないからである⁽¹³⁾。それ故、もしオルテガが現在生きているとしたら、会心の笑みを漏らしているかもしれない。彼がもっとも心血を注いだスペインの欧州化がまさに現実になりつつあるからだ。

そこで、本小稿の第2節で我々は「オルテガの生涯と業績」について先ず触れた後、彼の多方面における業績のなかでも、まさに燦然と輝く社会学会での二業績、すなわち具体的には『無脊椎のスペイン』(*España invertebrada*,1921)と『大衆の反逆』(*La rebelión de las Masas*,1930)とを取り上げ、第3節「オルテガの『無脊椎のスペイン』」と第4節「オルテガの『大衆の反逆』」とに分けて、その内容を吟味検討してみたい。そして、第5節「おわりに残された課題」についても若干付言しておきたい。

2. オルテガの生涯と業績

ホセ・オルテガ・イ・ガセット (José Ortega y Gasset) は1883年5月9日スペインはマドリードでこの世の生を享けた。父ホセ・オルテガ・ムニーリャは当時の指導的な新聞『エル・インパルシアル』(*El Imparcial*=公正)の編集主幹である一方、小説家としても有名なジャーナリストであり、母のドロレス・ガセー・イ・チンチーリャは同紙の創立者の娘であった。かくして彼は後年「私はあまりジャーナリストらしくないが、輪転機の上で生まれた」と語っているのは、こうした事情を指している。またこの両親に加えて、父方の祖父がやはり政治評論を得意とするジャーナリストであり、母方の祖父が政治家でもあったという家庭環境は、後代のオルテガ自身の諸活動を理解する重要なヒントを与えることになる。ところで、オルテガは壮大な体系的著作は何も残さなかったが、それは「新聞や雑誌の記事とを精神の欠くべからざる形式」と考え、殆どすべての論文をまず新聞や雑誌に発表していたからにほかならない。

さて、長じたオルテガは8歳のとき両親のもとを離れて、南部のマラガ近郊にあるイエズ

ス会経営のサン・エスタ＝スラオ学院に入学した。この学院に在学した6年間では、彼はギリシャ語とラテン語の学習に努めたようで、そこを卒業すると1897年14歳で同じくイエズス会経営のデウスト大学に入学し、哲学と法律を専攻する。ところが翌98年15歳の時マドリード国立大学に移るが、同時にこの年オルテガの生涯に極めて大きな影響を及ぼす国家的事件に遭遇した。それは米西戦争による母国スペインの敗北である。まさにスペイン人はこの冷酷な事実を前にして打撃を受け、国全体に文字通り危機感がみなぎった。とりわけ知識人の受けた衝撃は大きかったが、彼等は冷静にスペインが衰退した原因を尋ね、再建への途を模索した。それが一般に「98年の世代」(La generación del 98)と呼ばれた人びとで、例えば、ウナムノ(哲学者)、バロツハ(小説家)、アリソン(評論家)等であり、特にそのグループの実質的リーダーで最年長のミゲル・デ・ウナムノ(Miguel de Unamuno, 1864-1936)にオルテガ自身の存在が認められた点も見逃せない。

ところで、1902年オルテガは19歳でマドリード大学哲学・文学部の学士号を得、またその2年後には「紀元1000年の恐怖——ある伝説の批評」(Los terrores del año 1000, Critica de una leyenda)と題する学位請求論文で博士号を取得する。そして、翌年の05年にはスペイン政府奨学金により、3年間に及ぶ第1回目のドイツ留学を経験する。そこでは、ライプツヒヒ、ベルリン、マールブルクの各大学にて勉学し、特にライプツヒヒ大学では心理学者のW.M.ヴント、ベルリン大学では生の哲学者で、かつ形式社会学者のG.ジンメル、そしてマールブルク大学では新カント学派の哲学者H.コーエンに師事した。そのなかでも特に愛着を覚え、その人格と識見とに傾倒したのはコーエンであったようだ。何故ならば、このマールブルク大学で過ごした二年間は、オルテガの精神形成上極めて重要な意味を持っており、後年「少なくとも私の希望の半分と、私の知的訓練の殆どすべてをこの町に負っている」と述懐しているからだ。そして、彼の独創的特徴の一つに数えられるラテン的なものとゲルマン的なものとの見事な結合が生み出されたのも、また、1921年の『無脊椎のスペイン』に見られるゲルマニズムの重視も、青年時代のドイツ留学の影響と言えるからである。

そして、オルテガは1908年に帰国すると、25歳でマドリードの高等師範学校の教授の地位を得る。そこで二年間教鞭を執った後、27歳で今度は国立マドリード大学哲学・文学部の形而上学教授となり、しかも、この年ローサ・スポトルノ・トペートと結婚することとなる。

また、彼は翌11年には第2回目のドイツ留学を文部省の派遣で再度マールブルク大学で一年間送ることとなる。そして、帰国後の14年オルテガ31歳のときに、最初の哲学的著作である『ドン・キホーテに関する思索』(*Meditaciones del Quijote*)を発表し、そこで「私は、私と私の環境である」(*Yo soy yo y mi circunstancia*)というオルテガ哲学の主要概念を提示している。つまり、この最初の「私」は私の魂でも私の肉体でも私の性格でもなく、またそれらの総合でもなく、それは「生の計画」であり、「実現せねばならない自己の姿」すなわち「私の生」なのである。第二の「私」は主観的な自我、つまりデカルト流の私、別元すれば純粋な自我であり、そして最後の「私の環境」とはその自我を取り囲むすべて、つまり周囲世界

である。この第二の「私」と最後の「私の環境」との弁証法的な対話、すなわち相互的なダイナミックな緊張関係によって、第一の私の生を形成しているのである⁽¹⁴⁾。

また、オルテガはこの1914年にはマチャド・マエスツなど当時の代表的知識人と共に「スペイン政治教育連盟」(La Liga de Educación Política Española)を結成し、それを記念して自ら「古くて新しい政治」(Vieja y Nueva Política)と題する講演を行っている。こうして実践的な政治運動に参加すると共に、この頃から幾つかの雑誌を主宰するが、そのなかでも重要なものは『エスパーニャ』(España=スペイン)誌や『傍観者』(El espectador)や西欧評論(Revista de Occidente)誌であろう。そして、『エスパーニャ』誌は1915年に創刊され、また『傍観者』は不定期に出されたエッセイ集であって、第1巻が16年、第2巻が翌年の17年と続き、最終巻第8巻は34年に公刊されており、そして23年に創刊された『西欧評論』誌は、当時のヨーロッパにおける最も知的な雑誌の一つに数えられている。

ところで、その当時のスペインとは言えば、第一次世界大戦では中立を守ったものの、次第に社会危機を深めていた。スペイン経済は対戦中には発展したが、それと共に労働者階級を成長させた点も見落とせない。すなわち、労働者総同盟と全国労働連合は1916年に戦略協定を結んで以来、ストライキによって政府を脅かし、時には臨時政府樹立にまで発展していた。しかるに他方で、カタルーニャ地方での自治権要求の運動も次第に高まりつつあり、国外ではモロッコの独立運動がスペイン軍に打撃を与えていた。こうして1923年になると、労働攻勢カタルーニャ自治権要求運動を前にして、保守派は軍事独裁以外に解決の方法を見出すことが出来ず、プリモ・デ・リベラ将軍による軍事独裁内閣を成立させることとなる。かくしてリベラ将軍は議会解散や憲法停止を断行し、「愛国同盟」と呼ぶ単一政党を組織支配することとなる。そこでオルテガ自身が師と仰ぐウナムノはこうした独裁制を激しく非難したために、国外に追放されたが、彼自身も1929年政府の大学への介入を抗議して、マドリード大学に辞表を提出している。彼46歳での出来事である。

なお、1910年から始まり29年に終わるマドリード大学形而上学教授時代にあって、オルテガの注目すべき研究業績としては、何といても第一に1920年『エル・ソル』(El Sol=太陽)紙に連載し、翌年にはとりまとめて単行本として広く世に問うた『無脊椎のスペイン』が挙げられよう。この著は現代スペインの病理の解剖をテーマとするが、そのなかで言わば大衆社会論の原型を提示しており、我々は次節の第3節「オルテガの『無脊椎のスペイン』」でその内容を詳述してみたい。そして、舞台をスペインからヨーロッパ全体に拡げて、文明論の次元にまで発展させたものこそ、1926年に同じく『エル・ソル』紙に連載された『大衆の反逆』であって、1930年には一冊にまとめて刊行される。するとたちまちスペイン国内はもとより、ドイツでもベストセラーとなった。そして今日なお英、独、仏語をはじめ日本語にも翻訳され、出版されている永遠のロングセラーと言えよう。それ故、オルテガの諸著作のなかでも最も有名なものとなっており、当然我々も第4節「オルテガの『大衆の反逆』」において、その中味を幾分具体的に検討してみたい。

こうしてオルテガはヨーロッパの辺境の地スペインにこの世の生を享けたが故に、他のヨーロッパ諸国の思想家達よりも強烈に、絶えずヨーロッパというものを意識しながら思考を展開させてきた。それは時によると『無脊椎のスペイン』におけるように、西欧諸国のあり方を手本にして後進国スペインの欠陥を指摘し、西欧化の道を通ってこそスペインの再興が可能であると説く立場になり、また時によると、自らがその一員であるヨーロッパの行く先を案じ、ヨーロッパ文明の救済を熟っぽく説く立場つまり『大衆の反逆』となって現われている。

そして、『大衆の反逆』執筆後についてもここで触れておくと、オルテガは1930年にリベラによる独裁制に反対するために自ら立ち上がり、評論家マラニョンや小説家アセーラと共に、「共和制擁護のための集団」(Agrupación al servicio de la República)を結成した。これは原則的には政党ではなかったけれども、第三次共和制の成立と共に実質的な政党となり、彼はその代表として憲法制定議会の一員となった。しかしながら、その翌年には「共和制の修正」(Rectificación de la República)と題する講演を最後に議員を辞職し、集団も解散することとなる。

そして、1936年にスペインの内乱が勃発するとオルテガはスペインを離れ、最初の三年間はフランスとオランダで過ごし、例えば彼の代表作『大衆の反逆』フランス語版用のかなり長い長文の「フランス人のための序文」(Prólogo para frances)を書いている。その後はアルゼンチンとポルトガルを足場にして著述、講演活動を続けていたが、1946年には再びスペインに帰って、「人文研究所」(Instituto de Humanidades)を設立し、戦後のスペインの知的復興に努めた。そして、彼の代表作の一つに数えられる『人と人びと』(*El hombre y la gente*,1957)はこの研究所で行った連続講演をまとめたもので、「ライブニッツにおける原理の概念と演繹理論の発展」(*La idea de principio en Leibniz y la evolución de la teoría deductiva*,1958)や『世界史の一解釈』(*Una interpretación de la historia universal*,1960)などと同じように、生前には出版されることもなく死後になって刊行されたのである。

それにしても、帰国後のオルテガは当時の社会情勢からくるさまざまな制約もあって、政治的な発言をすることは勿論、新著を出版することもなく、主としてスペイン、ドイツ、スイスでの講演活動に力を入れていたようである。その最晩年のオルテガをマドリードに訪ねたわが国の哲学者小島威彦は、「オルテガ、マルセル、ハイデッガー——歴訪記の中より——」において次のように記述する。すなわち、「黒ずんだ疲れた表情を、あの長身の上にながながと延びた怪異な顔面、西田先生の鼻をもう一倍大きくしたやうな顔に漂はせながら、自分の著書を今頃一つ位紹介してゐる程度の日本の哲学的市場の貧困を淋しさうに想像する。しかし、落貧たる、而もかけがえの無い現実の中で確信を持って己が行くべき道を識ってゐる人、あらゆる具体的生活境遇の混沌のなかで瞬間のいのちの神秘的な構造を予感する人、生活の中に自己を見失はない人、かかる人こそ真の明晰の頭脳であるといいつつ、同時に彼は生きるとは自己の迷いを感じずることであり、難破せる人の如く縋りつきうるやうな何物かを本

能的に捜し求める、かの悲劇的な、のっぴきならぬ、絶対に嘘偽りのない場面に直面して、彼の生命の混沌はまことの秩序を獲得しようとする——これこそ唯一真実なる思想、『難破者の思想』である」と語るオルテガであった⁽¹⁵⁾と。それにしても、小島の訪れた1955年4月29日には、オルテガの病気はかなり進行しており、同年10月18日に病没している。享年72。

なお、第2節「オルテガの生涯と業績」について記述を終えるに当たって、ここで彼の根本思想はドイツのF.W.ニーチェ、W.ディルタイらの流れをくむ「生の哲学」に根ざすものであるが、師ウナムノのように理性を生に敵対するものと考えず、ウナムノ的非合理主義をディルタイから学んだ「歴史的理性」あるいは「生命的理性」によって超えることにより、生と理性との統合を旨とする独自の「生の哲学」を構想し、この立場から現代の問題や文化一般を論評して、スペインのみでなく広く全ヨーロッパの思想界に大きな影響を与えた⁽¹⁶⁾。そのオルテガの諸著作や諸論文諸講演は上記のもの以外のものでも、例えばその著作に限って具体的に見ても、次のようなものが挙げられよう。

まず、オルテガの著作としては『現代の課題』(*El tema de nuestro tiempo*,1923)をはじめとして、『芸術の非人間化』(*La deshumanización del arte*,1925)、『小説の考察』(*Ideas sobre la novela*,1925)、『ミラボー、あるいは政治家』(*Mirabeau o el politico*,1927)、『言語の本質』(*Espiritu de la letra*,1927)、『大学の使命』(*Misión de la Universidad*,1930)、『技術論』(*Meditación de la técnica*,1939)、『自己沈潜と自己疎外』(*Ensimismamiento y alteración*,1939)、『体系としての歴史』(*Historia como sistema*,1941)、『愛について』(*Estudios sobre el amor*,1941)、『演劇の理念』(*Idea del teatro*,1958)、『ゴヤ論』(*Goya*,1958)、『カント、ヘーゲル、ディルタイ』(*Kant, Hegel, Dilthey*,1958)、『若い民族に関する考察』(*Meditación del pueblo joven*,1958)、『ヨーロッパ論』(*Meditación de Europa*,1960)、そして『哲学の起源と結末』(*Origen y epílogo de la filosofía*,1960)等々枚挙に遑が無い。そして、例えば1939年に世に問うた『技術論』の冒頭で、彼は「著作家の使命は、何年か先に問題になるであろうことを読者のために予見し、論争が起こるよりも前に、その問題に関する明確な観念を読者に提供することだ」⁽¹⁷⁾と述べているように、既に第1節でも触れたように彼の将来展望はまさに抜群であった⁽¹⁸⁾。

3. オルテガの『無脊椎のスペイン』

オルテガ・イ・ガセットが1921年に広く世に問うた*España invertebrada*は、従来わが国では『背骨なきスペイン』⁽¹⁹⁾とか、『背骨なしのスペイン』⁽²⁰⁾などと訳出されてきたが、ここでは比較的広く用いられている『無脊椎のスペイン』⁽²¹⁾を採用することにする。

さて、オルテガによれば、ヨーロッパ社会は歴史を通じて三回の危機——彼の言う危機とは、二つの「信念」体系の狭間にあって、いずれにも落ち着かぬ過渡的状況のことである——に直面したと解する。すなわち、まず古代社会末期の危機とは、ギリシャ・ローマの古

典文明の崩壊からキリスト教信仰の確立までの過渡期であって、これは遅くとも紀元前1世紀から紀元後4世紀の初めまで続いた。次いで、近代文明の成立に先立つ危機とは、中世のキリスト教信仰を基盤とする生の体系から近代合理主義を中核とする生の体系に決定的に移行するまでの過渡期であって、これは14世紀から17世紀の初めまで続いた。そして、現代の危機とは、われわれ現代人が近代文明の諸原則に決定的に確信を持てなくなった事実から生じたものであって、オルテガの表現を借りれば、現代人は今や三百年余りにわたって近代という地面にキャンプしていたけれども、そろそろ天幕をたたんで、新しい歴史的空間へ、また新しい他の生の体系へと、再び移住の旅にでるところである⁽²²⁾。

そこで、オルテガはヨーロッパの直面する危機の源泉こそが所謂「大衆の反逆」にあるとして、大衆社会批判をしばしば企画している。だが、その主要な論説としては、何といても本節で取り上げる1921年の『無脊椎のスペイン』と次節で取り上げる『大衆の反逆』であろう。つまり、前者は現代スペインの病理の解剖をテーマとするも、そのなかで大衆社会論の原型を提示しているに過ぎず、また、後者は舞台をスペインからヨーロッパ一般に広げ、さらに「大衆人」(homo masas)の呼称を打ち出し、大衆人の出現の背景、その特徴、その特異な行動様式などを徹底的に論じている。

さて、オルテガはマドリード大学教授となった1910年に行った講演「政治計画としての社会教育」(La pedagogia social politico)のなかで、スペイン人にとっては政治に関心を抱くことは回避しえない事柄であることを説き、「スペイン人は何よりもまず政治家でなければならない」と強調している⁽²³⁾。その同じ彼(オルテガ)がこの『無脊椎のスペイン』では第1部「分立主義と直接行動」と第2部「すぐれた者の欠如」というタイトルで、自らの所論を展開するけれども、その第1部の冒頭で「私は政治的な問題を解決しようとする際、しばらくその問題から遠ざかり、それを歴史的なパースペクティブのなかに置いてみるのがまったく無駄であるとは思わない。このような距離をおいて眺めると、もろもろの事実がおのずから自らの姿を明らかにし、深く秘められた現実をより明らかに示す姿勢を自発的にとると思えるからである。したがって、この試論の試みでは、扱われているテーマは歴史的であって、政治的なものではない。本書に見られる今日のスペインのさまざまな集団や風潮についての見解を、攻撃的なものと解さないでいただきたい」⁽²⁴⁾と述べ、極めて低姿勢で筆をおこしている。

そして、オルテガは「最近の20年間のスペインの政治情勢の中で最も特徴ある現象の一つは、地方主義や独立主義や分立主義、つまり人種的、領土的な分離運動の出現である。このような運動の真の歴史的現実がなんであるかを、じゅうぶんに承知しているスペイン人はいったいどれほどいるだろうか？少ないのではないかと私は案じている」と言い、問題提起をする。次いで彼はそのような「歴史的生の現象を分立主義」と呼び、その「分立主義の本質は、各集団が自己を部分として感じなくなり、その結果、他の者と感情を共有しなくなることである。彼らにとっては、他者の希望や必要はどうでもいいこととなり、他人の希望が

かなえられるのを助けようとして連帯することもなかろう」と解する⁽²⁵⁾。また、オルテガはこの「分立主義」の心理分析を試み、次のようにまとめている。すなわち、「分立主義が現われるのはある階級や職業集団の中になんらかの原因から、自分たち以外の階級は十分な社会的実体として存在しないとか、それほどでなくとも、存在するに値しないと考える知的虚像が生じたときである。さらに簡単に言えば、分立主義とは、われわれがなぜ他者を考慮しなければならないのか分らないと考えるときの、あの精神状態である」と。そして、彼は分立主義つまり他者を考慮に入れたくないという感情から必然的に出てくる戦術こそ「直接行動」であると把握している⁽²⁶⁾。

次いで、オルテガは第2部「すぐれたものの欠如」では、この「人間らしさ」とはその人の人格ではなく、その周囲にあるのだ。それは集団的表象に由来するもので、その人を取り巻く神秘的な光輪、感情的な後光である。民衆はそのような人たちを信じ称揚する。そして、大衆のこの信仰、尊敬が平凡な人格のまわりに集積して現われているのだ。それ故一人の人間はその個人的資質のゆえに影響力があるのではけっしてなく、大衆が彼のなかに託す社会的力のゆえにそうあるのだ、と解する。また、彼は「国家とは選ばれた少数者によって組織され、構成された、人間集団である。われわれの政治信条がいかなるものであろうとも、われわれはこの真実を認めなければならないのであり、これは政治問題が動いている地平よりもはるかに深い歴史的現実の地層にかかわる事柄である。国家という社会がとりうる法的形態は、人間の考える限り民主主義的であったり、共産主義的でさえありうる。しかしながら、実際に作用している超法律的構造は、つねに少数者が大衆に及ぼすダイナミックな活動にある」にも拘わらず、「ある国家において大衆であること——すなわち、指導者である少数者に従うこと——を拒否するときには、その国家は崩壊し、社会は解体し、釈迦の混沌や歴史的無脊椎化が起こる。われわれスペイン人は、今日この歴史的無脊椎化の極端な場合を体験しているのである」と指摘する。したがって、「スペインの社会はかなり前から社会でなくなりつつある。なぜかと言えば、社会形成活動の根本そのものが侵されているからだ」とオルテガは診断する⁽²⁷⁾。

それを受けて、本書の末尾に近いところでやや長文ではあるけれどもオルテガは「自分が風俗で大衆であるにもかかわらず、指導者はいらないと考え、思想や政治や好みに関しても独力で自己を導けると考える民族は、必ずや自分自身の没落をひき起こすだろう。私の考えでは、スペインはこの倒錯の悲しむべき例である。さらに、もしイベリア半島の一種族あるいは諸種族が、思考もしくは実践の才能を持ったすぐれた人物を多数生み出していたら、その量にものを言わせて大衆の不従順にじゅうぶん対抗できていたかもしれない。しかしそうはいかなかった。大衆は耐えることのない生の攪乱——これは政治的なものよりはるかに広範囲にわたりがつ重大である——に身をまかせ、数世紀この方、国家機構の破壊や解体や打倒や粉碎以外のことはしなかった。大衆が模範にあこがれ、世代ごとにスペイン人の型（タイプ）を向上させようとはせず、逆に低下させている。日ごとにますます粗野に、鈍重にな

り、その力や熱情や勇気は減退して、最後には恐ろしいくらい生命力を喪失するに至っている。大衆の感情的反逆、すぐれた者への嫌悪、すぐれた者の欠如——以上がスペインの大きな挫折の真の原因である」⁽²⁸⁾と冷静な分析を試みている。

4. オルテガの『大衆の反逆』

まず、オルテガが1930年に広く世に問うた*La reberión de las masas*をこれまでわが国では『大衆の反抗』⁽²⁹⁾とか『大衆の蜂起』⁽³⁰⁾とか、『大衆の叛逆』⁽³¹⁾とか『大衆の反逆』⁽³²⁾などと訳出されてきたが、ここでは最も広く採用されてきた『大衆の反逆』を使用することにした。しかも、彼の代表作であるこの名著は「ルソーの『社会契約論』が18世紀を代表し、マルクスの『資本論』が19世紀を象徴するように、20世紀を表現している」と言った評価さえある⁽³³⁾ので、われわれもここでその内容を具体的に検討してみたい。

さて、1930年に刊行されたオルテガの『大衆の反逆』が、ハンガリー生まれの社会学者カール・マンハイム (Karl Mannheim, 1893-1947) の『変革期における人間と社会』(ドイツ語版=1935年、英語版=1940年)と共に、ヨーロッパに大衆社会論の誕生を告知する、まさに記念碑的な作品であることはいままでもない。その冒頭で彼は次のように書いている。すなわち、「ことの善し悪しはともかく、今日のヨーロッパの社会生活において最も重要な一つの事実がある。それは大衆が完全な社会権力の座に上がったことである。大衆はその本質上、自分自身の存在を指導することもできなければ、また指導すべきでもなく、いわんや社会を支配するなどおおよびもつかないことである。したがってこの事実は、ヨーロッパが今や民族、国家、文化の直面しうる最大の危機に見舞われていることを意味している」⁽³⁴⁾。そして、オルテガはこうした危機を「大衆の反逆」と呼ぶのである。

では、彼の言う「大衆」(masas)あるいは「大衆人」とはそもそもどのような存在の人びとを指すであろうか。オルテガは社会には少数者と大衆がいるとして次のように言う。つまり、「社会というものはつねに、少数者と大衆という二つの要素からなるダイナミックな統一体である。少数者とは特別な資質をそなえた個人、もしくはそうした個人からなる集団であり、大衆とは、特別な資質をそなえない人びとの総体である。したがって、たいしゅうという言葉をただ単に『労働者大衆』だけをさすものだというふうに解さないでいただきたい。大衆とは『平均人』のことである」⁽³⁵⁾とか、「大衆とは善きにつけ悪きにつけ、特別な理由から自分に価値を見いだすことなく、自分を『すべての人』と同じだと感じ、しかもそのことに苦痛を感じないで、自分が他人と同じであることに喜びを感じるすべての人びとのことである」⁽³⁶⁾とか「社会を大衆とすぐれた少数者に分けることは、人びとを社会的な階級に分けること」⁽³⁷⁾であって、彼自身が使用する「大衆」という言葉には特有の含意がある(補注)。

(補注) オルテガは1910年の『エル・インパルシア』紙で、「真の社会主義者はカール・

マルクスだということにはならないし、その確認する必要もない。労働者の党が唯一の完全に道義的な政党だということにはならない」と明言しているところを見ても、彼のスペインやヨーロッパ改革構想にとって、マルクス及びマルクス主義は受け入れられないばかりか、妨げにすらなるのか、上述の文章のなかでもそれが垣間見られる。それ故「ちなみに、オルテガがマルクス主義者や左翼陣営において決して好ましい存在でないことはよく知られるところであり、彼らの反発の理由も、それとして理解できぬこともない。いやむしろ、こうした傾向は日本の精神界一般に潜在し、無意識のオルテガ・アレルギーを生みだしていると言ってよいかもされない。このために人々はあまりまともにオルテガを読もうとしないのであり、彼への反発は単なるイデオロギー上の対立からきているとのみは思えないのである」⁽³⁸⁾といった指摘もあることをここに付記しておきたい。

かくして、オルテガは本来少数者の領域が今日大衆によって占拠されていることを問題にする。つまり、その起因の一つにドイツの経済学者で社会学者でもあるヴェルナー・ゾムバルト（Werner Sombart,1863-1941）が指摘した「AD.6世紀にヨーロッパの歴史が始まって以来1800年までの総人口は1億8千万人を超えることはなかったが、1800年から1914年のおよそ一世紀余りの間に4億6千万人へと激増した」ことをオルテガは挙げている。したがって、今や大衆は趣味、芸術、政治、経済などの近代社会の生活のあらゆる面において「支配」していると彼は主張する。しかし、今日の大衆は以前には少数者だけに保留されていたと思われる生活分野」の大部分を占めているだけではなく、「少数者に対して不従順となり、少数者に服従することも、少数者の模範に従うことも、また少数者を尊敬することもなく、その反対に少数者を脇に押しつけ、彼らにとって代わろうとしている」⁽³⁹⁾。

また、「生」(razon)の哲学者としてのオルテガは人間を「高貴な生」すなわち「努力」によって名声を獲得する人間——かかる人間を彼は「貴族」と呼ぶ——と「風俗の生」すなわちその生き方が「無気力」な人間——同様に「大衆」あるいは「大衆人」と呼ぶ——の二類型に区別する。そして、後者の大衆人とは「平均人」であって、彼らは一方でその自己閉鎖性と不従順性の故に、優れた少数者の指導を受け入れる可能性は低く、他方で生の水準を高めたとはいえ文明の原理を理解するだけの能力を持ち合わせていない点で問題がある。したがって、「風俗な生」とか「無気力な生」とか「閉鎖的な生」と呼ばれる大衆の生は、「高貴な生」の持ち主である貴族とは異なって、自分自身には何も課さず、現在のあるがままで満足し、自分自身に陶醉している生であって、その本質は義務を忘れ権利のみを要求するあまり、大衆はなぜかあらゆることに介入し、しかも暴力的にのみ介入してしまう。つまり、大衆人は、怠惰なる「風俗の生」のために、対話に耐えるよりも暴力に安易に訴え、技術を生んだ思想を顧みることなくただそれを乱用してしまう⁽⁴⁰⁾。

さらに、オルテガはこの大衆人を「満足しきったお坊ちゃん」(señorito satisfecho)とも規定し、この新しいタイプの人間の心理構造を次のように分析する。つまり、第1に、大衆人は生まれた時から生は容易であり、あり余るほど豊かで、なんら悲劇的な限界を持っていないという根本的な印象を抱いている。したがって平均的な各個人は自分のうちに支配と勝利の実感を持っている。第2に、この支配と勝利の実感が大衆人にあるがままの自分を肯定させ、彼の道徳的、知的財産は立派で完璧なものだと考えさせる。この自己満足の結果として、彼は外部からの一切の働きかけに対して自己を閉ざし、他人の言葉に耳を傾けず、自分の意見を疑ってみることもなく、他人の存在を考慮しなくなる。したがって第3に、大衆人はあらゆることに介入し、なんらの配慮も手続きも遠慮もなしに、つまり「直接行動」によって自分の低俗な意見を押しつけることになる。要するに、このような「お坊ちゃん」——彼は別名「甘やかされた子ども」とも「親元にいる子ども」ともいう——とは「家の外でも家の内と同じように振舞うことができると信じている人間であり、致命的で取り返しのできない、取り消し不可能なものは何もないと信じている人間」の時代がヨーロッパに到来してきたことを指摘する⁽⁴¹⁾。

そして、こうした大衆人の分析を試みた後、オルテガは『『専門主義』の野蛮性』についても言及する。そこでは科学技術こそが「自由主義的デモクラシーと手をたずさえて」量的な意味でもまた質的な意味でも大衆人を生み出したと彼はいう。その上で、オルテガは「今日、社会的権力を行使している者は誰だろうか」と自問自答し、技術、医者、財政家、教師等々の専門家たるブルジョアジーの貴族のなかでも、「最も高度にそして最も純粋に専門家を代表する」のは「疑いもなく科学者である」と断言する。したがって「今日の科学者は結果的には大衆人の典型ということになる。しかもそれは偶然のせいでもなければ、めいめいの科学者の個人的な欠陥によるものでもなく、科学——文明の基盤——そのものが、彼らを自動的に大衆人に変えているからである。つまり、科学者を近代の原始人、近代の野蛮人にしてしまっているからである」と主張する。それというのも、これらの専門的知識人とりわけ科学者は「世代ごとに自分の活動範囲を縮小していかなければならないために、科学の他の分野や宇宙の総合的解釈との接触」を失い、その「機械的頭脳」によってますます専門主義に落ち入っていくからである⁽⁴²⁾。

さて、以上のような立論を踏まえて、オルテガは究極の目標として、「今日のヨーロッパ文明を脅かしている最大の危険物」として「現代の国家」の出現を予見することになる。その階級は同時代におけるサンディカリズムとファシズムという政治的運動を念頭においていたようだ。すなわち、一般にサンディカリズムとは1900年前後のフランスの労働組合運動を指す。それは労働組合のストライキ・サボタージュ、ボイコットなどの直接行動による社会革命を目標にしたもので、ヨーロッパ各国の労働運動に大きな影響を与えていた。また、ファシズムについては、周知のように、イタリアでは1922年のムッソリーニの組閣に始まり、ドイツでは33年1月にヒトラーが政権を握り、オルテガの母国スペインでも39年フランコ將軍

による独裁政治をスタートさせている。ところが、やがて第二次世界大戦が勃発すると、幸いスペインのみ枢軸側を支持しつつも中立を守ったが、ドイツとイタリアの枢軸軍は一時優勢な時期もあったが、連合国の勝利に終わったことはまさに記憶に新しいところである。こうして、彼はサンディカリズムを大衆デモクラシーの典型として挙げ、その対極に「自由主義的デモクラシー」を掲げている⁽⁴³⁾。

こうして、オルテガは大衆人がまさに「自分は国家であると信じ」と共に、彼らが「政治、思想、産業などいかなる面でも国家の邪魔になる創造的な少数者をすべて押しつぶそうとする」危険性を有する点を訴える。しかも、こうした社会や生の官僚化によって、「社会は国家のために生きなければならなくな」り、ついには「民衆は国家という単なる装置や機械を養う肉やパンに化してしま」う、と警告を発している⁽⁴⁴⁾。

なお、この節を終えるにあたって、オルテガのまさに大衆社会論の主著『大衆の反逆』に対しては、わが国の西部邁も指摘するように、「この著書くらい誤解と非難を招いたものも少なくない。大衆蔑視の選良主義者、それがオルテガだ、という理解が今でもまかりとおっているのである。確かに彼は『社会を統治する能力を持たぬ大衆が、そのおのれの限界に反逆して、社会のあらゆる権力を篡奪している』という大衆社会の状況を徹底的に批判した。……専門人と化した現代の知識人がオルテガに同調しないのは当然の成り行きというほかない。また、教育と所得の量的水準を高めることに専念し、さらに民主主義をふりかざしつつ、社会の意思決定に参加すること自体に熱中している現代の一般大衆が擬似専門化し、他方で専門人が擬似民衆化していく、それが現代の趨勢」⁽⁴⁵⁾である点を考える時、上記のマルクス主義者や左翼陣営のみならず、知識人や一般民衆までも加わって、四面楚歌の感さえ呈してしまう。その一因にオルテガ自身大衆化の問題について決して解決策を語らなかったこともあろう。その点でこの節ですでに登場したマンハイムは英語版『変革期における人間と社会』では、無定形な大衆を所謂社会の計画化と教育の再生とによって、治療することをあつく説いているので、是非とも一読を望みたい。

5. おわりに——残された課題

まず、我々は本小稿では「現代を危機の時代とみなし、いち早く警鐘を鳴ら」したのがオルテガ・イ・ガセットであるとの認識のもと、危機を母国スペインやヨーロッパの今日的課題として考察したものとして、1921年の『無脊椎のスペイン』と30年に世に問うた彼の代表作『大衆の反逆』についてその所論を幾分なりとも検討してきた。これらの系譜に連なるものに、オルテガには1923年の『現代の課題』や死後になって刊行された57年の『人と人びと』などがある。それ故、こうした諸文献の検討も当然我々に残された課題でとしてあるが、前著の『現代の課題』については『理想』の特集号「現代に生きる思想家」(第253号)に、幸い訳者(池島重信)が記述する「オールテガ」において、「オールテガの主著は、何といっても『現代の課題』ということになる。現代——それが20世紀の人間の発端をなす時期であ

る、現代のうちに表現を求めているもの、現代の内的法則となっているものこそオルテガの間わんとするものである」⁽⁴⁶⁾として、彼の立場でもある「展望主義」の現代的意義についての一文が掲載されているので是非とも参照願いたい⁽⁴⁷⁾。

また、危機を歴史的に考察したもの——ここでいう「歴史的危機」とは、人間が世界観なしに、言い換えれば確信の体系なしに取り残されたときに、生がとる様式であるけれども——として、1933年の『ガリレオをめぐる』や41年の『体系としての歴史』などがある。当然こうした諸文献も上記の今日の問題として考察した諸文献との関連で考察する必要も求められよう⁽⁴⁸⁾。

次いで、オルテガが指摘した大衆化による社会心理の非合理性に関しては、その後多くの論者によって論ぜられているが、それらは二つの系統に大別できよう。つまり、その一つは危機における大衆化の病理的亢進の生み出した極限的状况としてのナチ社会の研究のなかから生み出された系列であり、残る一つは常態における大衆化状況としてのアメリカ社会を典型として試みられた系列である。

そして、前者の研究の一つに、オーストリアはウィーンの世界精神医学者V.E.フランクルが1940年から45年に至るナチズム哲学の具体的表現ともいえるべき強制収容所の組織的集団虐殺を、実体験のもともことにヴィヴィッドに描写した『夜と霧——ドイツ強制収容所の体験記録——』（原題は*Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager*,1947）がある。それによれば、虐殺事件は単に原始的な衝動とか一時性の興奮によるものではなく、むしろ冷静慎重な計画に基づくものであって、そこにはその悪魔的な非人間性が遺憾なく発揮されたのである⁽⁴⁹⁾。要するに、アメリカのジャーナリストであるエドガー・スノーが言うように、「近代的マスプロ工業が、人間を垂直に歩く動物から1キログラムの灰にしてしまう事業に動員された」⁽⁵⁰⁾のである。

また、後者の研究の一つに、アメリカの社会学者C.W.ミルズが1956年に世に問うた『パワー・エリート』（*The Power Elite*）である。それによれば、今日のアメリカ社会は、一方の極に主要かつ支配的な領域となった経済的・政治的・軍事的領域での高度に集権化された全能なパワー・エリートを置き、他方の極に未定型で無力なノン・エリートたる大衆を置き、この両者を対置させることによって、実は現代アメリカ社会にも全体主義社会を生み出す土壌が用意されつつあることに、彼は警鐘をならしている⁽⁵¹⁾。

それゆえ、このように見てくると、特にヨーロッパにあって危機における大衆化の病理的亢進を正面より分析検討したフランクルの研究は、オルテガの研究を具体的実証的に検証したのものとして詳述することも、我々に残された課題となろう。

続いて、アメリカの社会学者W.A.コーンハウザーが、1959年に世に問うた『大衆社会の政治』（*The Politics of Mass Society*）において、大衆社会論の二つのタイプとして、大衆社会の貴族主義的批判と民主主義的批判のあることを指摘したことはよく知られる。その際、彼は大衆社会の貴族主義的批判を代表するのがオルテガの『大衆の反逆』であるならば、その

民主主義的批判を代表するものに、ドイツ生まれの精神分析学者E.フロムの『自由からの逃走』があろう。そして、コーンハウザーによれば、貴族主義的批判が大衆参加の登場をまえにして、それに反対するエリートの価値の知的防衛を主題とするならば、民主主義的批判は、全体的支配に荷担するエリートをまえにして、それに反対する民主的価値の知的防衛を主題とするものである点で、まさに対蹠的である⁽⁵²⁾。それ故、フロムの『自由からの逃走』についての詳細な検討も残された課題である。

註

- (1) 長谷川高生『大衆社会のゆくえ——オルテガ政治哲学：現代社会批判の視座——』ミネルヴァ書房、1996年、p. ii。
- (2) 色摩力男『オルテガ——現代文明論の先駆者——』中央公論社、1988年。著書のサブタイトル。
- (3) 福武直編『社会学研究案内——問題点と文献解説——』有斐閣、1964年、224頁。
- (4) 竹内洋『社会学の名著30』筑摩書房、2008年、86頁。
- (5) 樺山紘一ほか編『人物20世紀』講談社、1998年において、西部邁が記述する「オルテガ・イ・ガセト『大衆の反逆』を刊行」の箇所(328頁)。
- (6) オルテガ著、桑名一博訳『大衆の反逆』白水社、1975年において訳者(桑名)の記述する「解説」の箇所(249頁)。
- (7) 森岡清美ほか編『新社会学辞典』有斐閣、1993年において、矢沢修治郎が記述する「スペインの社会学」の箇所(1563-1664頁)。
- (8) 北川隆吉監修『現代社会学辞典』有信堂高文社、1984年において安原茂が記述する「社会運動」の箇所(647頁)。
- (9) 原田鋼ほか編『現代政治学事典』桜楓社、1994年における「オルテガ」の箇所(110頁)。
- (10) 森宏一編『哲学辞典』(新装版)、青木書店、1995年における「オルテガ・イ・ガセト」の箇所(43頁)。
- (11) 小林道憲『20世紀とは何であったか』日本放送出版協会、1994年、211頁。
- (12) 青井和夫『社会学原理』サイエンス社、1987年、165頁。
- (13) 渡辺修『オルテガ』清水書院、1996年、196頁参照。
- (14) 長谷川、前掲書、24-25頁参照。
- (15) 小島威彦「オルテガ、マルセル、ハイデッガー——歴訪記の中より——」『理想』273号、理想社、1956年、59頁。
- (16) 渡辺静夫編『日本大百科全書』4(2版)、小学館、1994年において、伊藤勝彦が記述する「オルテガ・イ・ガセー」の項(456頁)参照。
- (17) オルテガ著、桑名訳『大衆の反逆』において、訳者の「解説」の箇所(249頁)参照。
- (18) 第2節「オルテガの生涯と業績」を書くに当たっては、主としてオルテガ著、桑名訳『大

衆の反逆』における訳者桑名が記述する「解説」(249-256頁)に負ったが、それ以外にも色摩、前掲書の「オルテガ年譜」の箇所(240-253頁)、そして高橋徹責任編集『マンハイム オルテガ』(『世界の名著』68)中央公論社、1979年における「年譜オルテガ」の箇所(551-554頁)なども参照した。

- (19) 色摩、前掲書、11頁以下。
- (20) 社会科学大事典編集委員会編『社会科学大事典』2、鹿島研究所出版会、1968年において、鶴見俊輔が記述する「オルテガ・イ・ガセット」の項(351頁)。
- (21) オルテガ著、桑名一博訳『オルテガ著作集2. 無脊椎のスペイン』白水社、1969年をはじめ、高橋徹責任編集、前掲書において、編者が記述する「マンハイムとオルテガ」の箇所(82-84頁)や渡辺、前掲書、55頁以下、そして木庭宏『ハイネとオルテガ』松籟社、1991年、83頁以下。
- (22) 色摩、前掲書、20-21頁参照や、筆者の一人(小笠原)「大衆人と風俗な生——オルテガの所論を中心に——」『世界思想』30号、世界思想社、2003年、44-45頁。
- (23) オルテガ著、桑名一博訳『オルテガ著作集2. 無脊椎のスペイン』における訳者「解説」の365頁参照。
- (24) オルテガ著、桑名一博訳『オルテガ著作集2. 無脊椎のスペイン』255頁。
- (25) 同、269-281頁。
- (26) 同、296-300頁。
- (27) 同、314-316頁。
- (28) 同、357-358頁。
- (29) 色摩、前掲書、12-245頁。
- (30) オルテガ著、樺俊雄訳『大衆の蜂起』創元社、1953年や、福武直ほか編『社会学辞典』有斐閣、1958年における「オルテガ・イ・ガセット」の項(70頁)など。
- (31) オルテガ著、佐野利勝訳『大衆の反逆』筑摩書房、1953年や、今村仁司編『現代思想を読む事典』講談社、1988年において、桜井哲夫が記述する「群衆(大衆)」の箇所(177-178頁)や「オルテガ・イ・ガセット」の箇所(674頁)。ただし、同書において桜井が記述する「大衆社会」の項(406頁)では「大衆の反逆」といった記述も見られる。
- (32) オルテガ著、桑名一博訳『大衆の反逆』をはじめとして、同著、寺田利夫訳「大衆の反逆」、『マンハイム オルテガ』所収、鷲田小彌太『これでわかった現代思想・哲学大全』講談社、2005年、「オルテガ」の項(27頁)、見田宗介ほか編『社会学事典』弘文堂、1988年において徳永恂が記述する「オルテガ・イ・ガセット」の項(113頁)、長谷川、前掲書、ii頁以下、奥井智之『60冊の書物による現代社会論』中公新書、1990年、「オルテガ『大衆の反逆』」の箇所(48-50頁)、樺山ほか編、前掲書、「オルテガ・イ・ガセット『大衆の反逆』を刊行」の箇所(328頁)など。
- (33) 長谷川、前掲書、「まえがき」ii頁。

- (34) オルテガ著、桑名訳『大衆の反逆』49頁。
- (35) 同、53頁。
- (36) 同、54頁。
- (37) 同、55頁。
- (38) 木庭、前掲書、8頁。
- (39) オルテガ著、桑名訳『大衆の反逆』62-93頁。
- (40) 同、105-122頁。
- (41) 同、144-155頁。
- (42) 同、156-163頁。
- (43) 見田宗介ほか編『社会学文献事典』弘文堂、1998年において、奥井智之が記述する「オルテガ・イ・ガセット」『大衆の反逆』の項(58-59頁)。参照。
- (44) オルテガ著、桑名訳『大衆の反逆』164-174頁。
- (45) 樺山ほか編、前掲書において、西部が記述する「オルテガ・イ・ガセット『大衆の反逆』を刊行」の項(328頁)。
- (46) 池島重信「オルテガ」『理想』第253号=特集号「現代に生きる思想家」理想社、1954年、20頁。
- (47) 同、19-21頁。
- (48) 廣松渉ほか編『岩波哲学・思想事典』岩波書店、1998年において、大町公が記述する「オルテガ」の項(195頁)参照。
- (49) V.E.フランクル著、霜山徳爾訳『夜と霧——ドイツ強制収容所の体験記録——』(新装第8刷)、みすず書房、1988年、75-205頁。
- (50) 同、「出版者の序」2頁参照。
- (51) C.W.Mills, *The Power Elite*, pp.8-324. (鶴飼信成、綿貫譲治共訳『パワー・エリート』東京大学出版会、1958年、上、10-165頁、下、315-537頁。)
- (52) W.A.Kornhauser, *The Politics of Mass Society*, 1959年. (辻村明訳『大衆社会の政治』東京創元社、1964年、3-286頁)。奥井、前掲書、51頁参照。